

古文ドリル：敬意の方向 100問

対象：高校生・大学受験生（共通テスト～難関私大・国公立二次まで） **著作権**：個別指導塾フィット / 中本裕太

はじめに：敬意の方向とは

古文の敬語問題で **最頻出**なのが「敬意の方向」。

「誰から誰への敬意か」を問う問題。

敬語の種類	敬意の方向
尊敬語	動作主 を敬う
謙譲語	動作の受け手 を敬う
丁寧語	聞き手・読み手 を敬う

「誰から」の判別

地の文（地の文章）

- 敬意の発信者 = **作者**

会話文

- 敬意の発信者 = **話し手**（その会話をしている人物）

心内文（心の中の独白）

- 敬意の発信者 = **心内で思っている人物**

手紙文

- 敬意の発信者 = **手紙の書き手**

「誰へ」の判別

尊敬語

- 動作主**（その動作をしている人）への敬意

謙譲語

- **動作の受け手**（その動作を受ける人。「参る」なら行き先、「まかる」なら退出してくる所の主、「賜はる」ならくださる人）への敬意

丁寧語

- **聞き手**（会話の相手） or **読み手**（地の文・手紙文の場合）

識別の鉄則

1. **地の文 or 会話文 or 心内文** をまず確認
2. 敬語の **種類**（尊敬／謙譲／丁寧）を判定
3. 「誰から」「誰へ」を **動作の構造** で特定

二重敬語

二重敬語（せたまふ・させたまふ・しめたまふ・仰せらる など）は **最高敬意**。地の文では、天皇・皇族・摂関級など、最上位の人物への敬意を示す（会話文では、それより下の人にも使う）。方向の構造は通常の尊敬と同じ（地の文＝作者→動作主）。ただし「せ・させ」は使役のこともある（「女房に御簾を上げさせたまふ」のように、させる相手がいるとき）。使役でも「たまふ」は尊敬なので、「たまふ」の敬意の方向は変わらない。

敬意の方向の典型パターン

場面	発信者	敬語種類	受け手
地の文・尊敬	作者	尊敬	動作主
地の文・謙譲	作者	謙譲	動作の受け手
会話文・尊敬	話し手	尊敬	動作主
会話文・謙譲	話し手	謙譲	動作の受け手
会話文・丁寧	話し手	丁寧	聞き手
地の文・丁寧（日記等）	作者	丁寧	読み手

🎯 解き方のコツ（時短テクニック）

上の「識別の鉄則」が基本の考え方。

こちらは **試験本番ですばやく答えを出す** ための実戦テクニックです。

コツ① 「から」は 会話文か地の文か で2択即決

カッコ「 」の中なら **話し手**、カッコの外なら **作者**。これだけで「誰から」の多くは決まる。
地の文 → 作者から - 会話文「 」 → 話し手から - 会話の中の会話『 』 → その言葉を言った（思った）人から。ほかの人の言葉なら外側の話し手ではない。話し手が自分の言葉や思いを引くときは話し手から - 心内文（～と思ふ） → 思っている人から - 手紙文 → 書き手から

コツ② 「へ」は 敬語の種類で公式化

- **尊敬** → 動作主へ
- **謙譲** → 動作の受け手へ
- **丁寧** → 聞き手（会話文）／読み手（地の文・手紙文）へ

種類さえ決まれば「誰へ」は公式に当てはめるだけ。

コツ③ 「給ふ」の活用で「誰へ」の対象が変わる

- 四段「給ふ」（尊敬）→ 動作主へ
- 下二段「給ふ」（謙譲）→ 聞き手・読み手へ（会話文・手紙文で、話し手自身の「思ふ・見る・聞く・知る」に付く）

例：会話文中の「思ひ給へ」（下二段）→ 話し手から **聞き手** への敬意（謙譲）

コツ④ 二重敬語の方向は通常の尊敬と同じ

「せたまふ／させたまふ／しめたまふ」を見ても、**方向の構造は普通の尊敬と同じ**。地の文なら「作者→動作主」、会話文なら「話し手→動作主」。最高敬意のニュアンスは方向問題では問われない。

試験本番でのチェック順序

1. その敬語が **地の文／会話文／心内文／手紙文** のどこにあるかを確認 → 「誰から」決定
 2. 敬語の **種類**（尊敬／謙譲／丁寧）を判定
 3. 種類に応じた公式（尊敬＝動作主、謙譲＝受け手、丁寧＝聞き手／読み手）で「誰へ」決定
 4. 「給ふ」は **活用** をチェックして種類を間違えない
- この順番で **迷わず** 答えが出ます。

よくある引っかけ

- 会話文中の敬語を「作者から」と答える → 会話文は **話し手から**
- 謙譲を尊敬と取り違えて方向を間違える → 種類の判別が先
- 丁寧語の対象を動作主と答える → 丁寧は **聞き手・読み手** へ
- 心内文の敬語を作者からと誤答 → 心内の主体（その登場人物）から
- 『 』の中の敬語を、いつも外側の話し手からと答える → 『 』の中は **その言葉を言った（思った）人** から
- 「まかる」（退出する）を行き先への敬意と答える → **退出してくる所の主** への敬意

採点表

- 基礎（Q1～Q20）： /20
- 標準（Q21～Q50）： /30
- 応用（Q51～Q80）： /30
- 入試レベル（Q81～Q100）： /20
- 合計： /100

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

地の文・会話文の基本パターン。

Q1. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）帝、御文書か**せたまふ**。

答え：作者 → 帝 **解説**：地の文の尊敬二重敬語。動作主の帝を作者が敬う。

Q2. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）大臣、御文を**奉る**。

答え：作者 → 御文の受け手（高貴な人） **解説**：地の文の謙譲語。動作の受け手（御文を差し上げる相手）を作者が敬う。

Q3. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「これは尊く**侍り**」

答え：話し手 → 聞き手 **解説**：会話の丁寧語。話し手が聞き手を敬う。

Q4. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 中宮、**御覧**ず。

答え：作者 → 中宮 **解説**：尊敬語。動作主の中宮を、作者が敬う。

Q5. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「我れ、御文を**奉り侍り**」

答え：「奉り」話し手 → 御文の受け手（高貴な人）／「侍り」話し手 → 聞き手 **解説**：「奉る」（謙譲）→受け手、「侍り」（丁寧）→聞き手。一つの文で、受け手と聞き手の両方を敬う（同じ人のこともある）。

Q6. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 法皇、鳥羽殿へ**おはす**。

答え：作者 → 法皇 **解説**：「おはす」は「行く・来」の尊敬語（いらっしゃる）。動作主の法皇を作者が敬う。

Q7. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「君に**仕うまつり侍り**」

答え：「仕うまつり」話し手 → 君（動作の受け手）／「侍り」話し手 → 聞き手 **解説**：「仕うまつる」（謙譲）→受け手「君」、「侍り」（丁寧）→聞き手。

Q8. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 上、夜もすがら嘆か**せたまふ**。

答え：作者 → 上 解説：二重敬語（尊敬「す」＋尊敬「たまふ」）。動作主の上（天皇）を作者が敬う。

Q9. 敬意の方向を答えよ。

（会話文）「いま参り候ふ」

答え：「参り」話し手 → 行き先の高貴な人／「候ふ」話し手 → 聞き手 解説：「参る」（謙譲）→ 行き先、「候ふ」（丁寧）→ 聞き手。

Q10. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）中宮、御簾を上げさせたまふ。

答え：作者 → 中宮 解説：「させたまふ」は尊敬「さす」＋尊敬「たまふ」の二重敬語とみて、作者が中宮を敬う。「させ」を女房に上げさせる使役と読んでも、「たまふ」は尊敬なので答えは同じ「作者 → 中宮」。

Q11. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）大納言、御前に候ふ。

答え：作者 → 御前の高貴な人 解説：「候ふ」謙譲。お仕えする対象（御前にいる高貴な方）を敬う。

Q12. 敬意の方向を答えよ。

（会話文）「我れも参らんと申し侍り」

答え：「申し」話し手 → 申し上げる相手／「侍り」話し手 → 聞き手 解説：「申す」（謙譲）→ 受け手、「侍り」（丁寧）→ 聞き手。

Q13. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）君、いと美しき御姿におはす。

答え：作者 → 君 解説：「おはす」（尊敬・存在）。動作（存在）主体を敬う。

Q14. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「いと尊く**思しめし侍り**」

答え：「思しめし」話し手 → 思いの主（高貴な人）／「侍り」話し手 → 聞き手 解説：「思しめす」（尊敬）→ 動作主、「侍り」（丁寧）→ 聞き手。

Q15. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 僧、御物を**賜はる**。

答え：作者 → 御物の与え手（高貴な人） 解説：「賜はる（給はる）」は謙譲語で「いただく・頂戴する」の意。動作の出発点（物を与えてくれる高貴な人）を敬う。

Q16. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 帝、御琴弾か**せたまふ**。

答え：作者 → 帝 解説：二重敬語。

Q17. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「昨日、宮を見**奉り侍り**き」

答え：「奉り」話し手 → 宮（見る相手）／「侍り」話し手 → 聞き手 解説：「奉る」（謙譲の補助動詞）→ 見る相手の宮、「侍り」（丁寧の補助動詞）→ 聞き手。

Q18. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 法皇、御使ひを**遣はす**。

答え：作者 → 法皇 解説：「遣はす」（尊敬）。動作主を敬う。

Q19. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「君が**仰せらるる**やう」

答え：話し手 → 君 解説：「仰せらる」（尊敬二重）。動作主の君を話し手が敬う。

Q20. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「今宵の月は、いとおもしろく**候ふ**」

答え：話し手 → 聞き手 **解説**：「候ふ」は形容詞に付く丁寧の補助動詞（～ございます）。話し手が聞き手を敬う。

基礎編 / 20

【第2部】標準編（Q21～Q50）

複合敬語・物語の典型・心内文。

Q21. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 中將、御琴を弾き**たまふ**。

答え：作者 → 中將 **解説**：「たまふ」（尊敬補助）。動作主の中將を作者が敬う。

Q22. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「我れも、さなむ思ひ**たまふる**」

答え：話し手 → 聞き手 **解説**：「たまふる」は下二段「給ふ」（謙譲の補助動詞）の連体形（「なむ」の結び）。会話文・手紙文で、話し手自身の「思ふ・見る・聞く・知る」に付き、聞き手（読み手）を敬う。

Q23. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 大臣、御文を**奉りたまふ**。

答え：「奉り」作者 → 御文の受け手／「たまふ」作者 → 大臣 **解説**：「奉る」（謙譲）→受け手、「たまふ」（尊敬補助）→動作主。同じ動作に二方向の敬意。

Q24. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 従者、ことのよしを大臣に**申し**けり。

答え：作者 → 大臣（申し上げた相手） **解説：**「申す」は「言ふ」の謙譲語（申し上げる）。地の文の謙譲語なので、作者から、申し上げる相手の大臣への敬意。

Q25. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）帝、御酒を**参る**。

答え：作者 → 帝 **解説：**「参る」は飲食の場合は尊敬「召し上がる」。動作主の帝を敬う。

Q26. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）我れ、御所に**参る**。

答え：作者 → 御所の高貴な人 **解説：**「参る」（謙譲・参上）。行き先の高貴な人を敬う。

Q27. 敬意の方向を答えよ。

（会話文）「僧、殿に『御祈りは明日にて**候ふ**』と**申し侍り**き」

答え：「候ふ」僧（『 』の言葉を言った人）→ 殿（僧が話しかけた相手）／「申し」話し手 → 殿（申し上げた相手）／「侍り」話し手 → 聞き手 **解説：**『 』は僧の言葉なので、その中の丁寧語「候ふ」（～でございます）は、僧から、僧の話を聞いた殿への敬意。外側の「申す」（謙譲）は話し手から殿へ、「侍り」（丁寧）は話し手から今の聞き手へ。

Q28. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）中宮、御文を上を**御覧ぜ**させ**たまふ**。

答え：「御覧ぜ」作者 → 上（御文を見る人）／「たまふ」作者 → 中宮（見せる人） **解説：**「御覧ぜさせたまふ」は「御覧ず」＋使役「さす」＋尊敬「たまふ」で、「（上に）お見せになる」。「させ」は使役で敬語ではない。見る動作の「御覧ず」（尊敬）は見る人の上を、「たまふ」は見せる動作の主の中宮を敬う。

Q29. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）「ただ今、参り**候は**む」と**申し**けり。

答え：「候は」話し手 → 聞き手／「申し」作者 → 申し上げる相手 **解説：**「候は」は会話中の丁寧、「申し」は地の文の謙譲。発信者が異なる。

Q30. 敬意の方向を答えよ。

(心内文)「我れ、いかでこの御方に**仕うまつらん**」

答え：心内で思う人 → 御方 **解説**：「仕うまつる」(謙讓)。心内文の発信者(思っている人物) → 動作の受け手(御方)への敬意。

Q31. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 大納言、いかにせむと**思す**。

答え：作者 → 大納言 **解説**：「思す」は「思ふ」の尊敬語(お思いになる)。動作主の大納言を作者が敬う。

Q32. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「『君に**奉らん**』と**仰せらる**」

答え：「奉ら」「仰せらる」の言葉を言った人(仰せになった人) → 君(差し上げる相手)／「仰せらる」話し手 → 仰せになった人 **解説**：会話の中の会話『』の敬語は、その言葉を言った人からの敬意。「奉る」(謙讓)は、仰せになった人から、差し上げる相手の君へ。外側の「仰せらる」(尊敬の二重敬語)は、話し手から、仰せになった人へ。

Q33. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 若君、御湯**召したまふ**。

答え：作者 → 若君 **解説**：「召す」尊敬+「たまふ」尊敬補助。動作主を敬う。

Q34. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 御使ひ、宮に御文を**奉りて**、**まかり**出づ。

答え：「奉り」作者 → 宮(御文を受け取る人)／「まかり」作者 → 宮(退出してくる所の主) **解説**：「奉る」は「与ふ」の謙讓語(差し上げる)で、受け取る宮を敬う。「まかり出づ」は「(貴人のもとから)退出する」の謙讓語で、退出してくる所の主の宮を敬う(行き先の人ではない)。

Q35. 敬意の方向を答えよ。

(地の文)「これ**御覧ぜよ**」とて、中宮に花を**奉る**。

答え：「御覧ぜよ」話し手（花を差し上げる人）→ 中宮（見る人）／「奉る」作者 → 中宮 **解説**：「」の中は話し手から。「御覧ず」は「見る」の尊敬語で、見る人の中宮を敬う。「とて」の後の「奉る」（謙譲）は地の文なので作者から、受け取る中宮を敬う。

Q36. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 帝、いと物思はしげに**おはしまし**けり。

答え：作者 → 帝 **解説**：「おはします」は「おはす」より敬意の高い尊敬語。ここは「～げにおはします」（～様子でいらっしゃる）の補助動詞の使い方。動作主の帝を作者が敬う。

Q37. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「いま**まかり侍ら**む」

答え：「まかり」話し手 → 退出する場所の高貴な人／「侍ら」話し手 → 聞き手 **解説**：「まかる」（謙譲・退出）＋「侍り」（丁寧）。

Q38. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 中宮、御髪を梳ら**せたまふ**。

答え：作者 → 中宮 **解説**：「せたまふ」は尊敬「す」＋尊敬「たまふ」の二重敬語とみて、作者が中宮を敬う。「せ」を女房に梳らせる使役と読んでも、「たまふ」は尊敬なので答えは同じ「作者 → 中宮」。

Q39. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「『**御覧ぜよ**』と**仰せらる**」

答え：「御覧ぜよ」『』の言葉を言った人（仰せになった人）→ 見るように言われた人（御覧になる人）／「仰せらる」話し手 → 仰せになった人 **解説**：会話の中の会話『』の敬語は、その言葉を言った人から。「御覧ず」（尊敬）は、仰せになった人から、見る人へ。外側の「仰せらる」（尊敬の二重敬語）は、話し手から、仰せになった人へ。発信者が別々になる。

Q40. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 帝、使ひの者に禄を**賜はせたまふ**。

答え：作者 → 帝 **解説**：「賜はす」は「与ふ」の尊敬語（お与えになる）、「たまふ」は尊敬の補助動詞。どちらも、与える動作の主の帝を作者が敬う。

Q41. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 君、御心地いと苦しく**思しめす**を、慰め**奉る**。

答え：「思しめす」作者 → 君／「奉る」作者 → 慰める受け手（君） **解説**：「思しめす」（尊敬）→ 動作主、「奉る」（謙譲）→ 動作の受け手。同じ人物（君）に対して尊敬と謙譲が混在する典型。

Q42. 敬意の方向を答えよ。

(手紙文) 「君のおほせのこと、**承りて侍り**」

答え：「承り」書き手 → 承る相手（君）／「侍り」書き手 → 読み手 **解説**：手紙文では発信者は書き手、丁寧は読み手への敬意。

Q43. 敬意の方向を答えよ。

(会話文) 「さやうに**仕うまつる**べきやうにても**侍らず**」

答え：「仕うまつる」話し手 → お仕えする対象／「侍ら」話し手 → 聞き手 **解説**：「仕うまつる」（謙譲）＋「侍り」（丁寧）。

Q44. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 帝、御湯を**召して**、入ら**せたまふ**。

答え：作者 → 帝 **解説**：「召す」尊敬＋「せたまふ」二重尊敬。

Q45. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 院、御衣を**奉りて**、出で**たまふ**。

答え：作者 → 院 **解説**：「奉る」は衣服では尊敬「お召しになる」。動作主を敬う。

Q46. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「我れ、君の御心を**承り侍れば**」

答え：「承り」話し手 → 君（承る対象）／「侍れ」話し手 → 聞き手 解説：「承る」（謙譲）＋「侍り」（丁寧）。

Q47. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 僧、院に**参りて**、御物語**申し**、御衣を**賜はりて**帰る。

答え：「参り」「申し」「賜はり」作者 → 院（三つとも） 解説：三重の謙譲。「参る」は行き先の院を、「申す」はお話を申し上げる相手の院を、「賜はる」（いただく）は御衣をくださる院を、作者が敬う。謙譲語の「受け手」には、行き先・申し上げる相手・くださる人がある。

Q48. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「『これは尊し』と**申し侍り**」

答え：「申し」話し手 → 申し上げる相手／「侍り」話し手 → 聞き手 解説：会話の中の謙譲＋丁寧。発信者は同じ話し手。

Q49. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 中宮、ものも**おほせられず**。

答え：作者 → 中宮 解説：「仰せらる」二重尊敬＋打消。中宮を敬う。

Q50. 敬意の方向を答えよ。

(地の文)「**まかり**出で**侍り**なむ」と**申し**けり。

答え：「まかり」話し手 → 退出する所の高貴な人／「侍り」話し手 → 聞き手／「申し」作者 → 申し上げる相手 解説：会話部分（「」内）は話し手から。「まかり出づ」（謙譲・退出する）は退出する所の主を敬う。地の文の「申しけり」は作者から。

【第3部】 応用編（Q51～Q80）

入れ子の会話・複数の敬語連動・特殊敬語。

Q51. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）大臣、このよしを**奏したまふ**。

答え：「奏し」作者 → 帝（申し上げる相手）／「たまふ」作者 → 大臣 **解説：**「奏す」は帝（天皇・上皇）に「申し上げる」意の謙譲語（絶対敬語）なので、書いていなくても受け手は帝。「たまふ」（尊敬の補助動詞）は動作主の大臣を敬う。同じ動作に二方向。

Q52. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）「はや内裏へ**参りたまへ**」と、乳母、君に**申す**。

答え：「参り」乳母（話し手）→ 内裏の帝（参上する先）／「たまへ」乳母（話し手）→ 君（参上する人）／「申す」作者 → 君（申し上げる相手） **解説：**「」の中は話し手の乳母から。「参る」（謙譲）は参上する先の帝を、「たまへ」（尊敬の補助動詞「たまふ」の命令形）は参上する動作の主の君を敬う。「と申す」は地の文なので、作者から申し上げる相手の君へ。

Q53. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）「いとかしこくなむ思ひ**たまふる**」と**申し**けり。

答え：会話「たまふる」話し手 → 聞き手／地の文「申し」作者 → 申し上げる相手 **解説：**「たまふる」は下二段「給ふ」（謙譲の補助動詞）の連体形（「なむ」の結び）で、話し手から聞き手への敬意。地の文の「申し」は作者から、申し上げる相手へ。

Q54. 敬意の方向を答えよ。

（地の文）大納言、中宮に御絵を**参らせたまふ**を、中宮**御覧**じて、笑は**せたまふ**。

答え：「参らせ」作者 → 中宮／「たまふ」作者 → 大納言／「御覧じ」作者 → 中宮／「せたまふ」作者 → 中宮 **解説：**前半は二方向の敬語で、「参らす」（「与ふ」の謙譲語・差し上げる）は受け取る中宮を、「たまふ」は差し上げる大納言を敬う。後半の「御覧ず」「せたまふ」は動作主の中宮を敬う。一つの文の中で、敬う相手が入れかわる。

Q55. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「『かくと宮に**申せ**』と**仰せらるれば**、**承り侍りぬ**」

答え：「申せ」『 』の言葉を言った人（仰せになった人）→ 宮（申し上げる相手）／「仰せらるれ」話し手 → 仰せになった人／「承り」話し手 → 仰せになった人（仰せを受ける相手）／「侍り」話し手 → 聞き手 **解説**：会話の中の会話『 』の敬語は、その言葉を言った人（仰せになった人）から。外側の「仰せらるれ」「承り」「侍り」は、すべて話し手から。発信者は二人だけで、『 』の中と外で切り分ける。

Q56. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 帝、御物の怪に悩み**たまふ**を、皇后いと心苦し**と思しめす**。

答え：「たまふ」作者 → 帝／「思しめす」作者 → 皇后 **解説**：それぞれ異なる動作主への尊敬。

Q57. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 御乳母、若君を抱き**奉りて**、**まかり**出づ。

答え：「奉り」作者 → 若君／「まかり」作者 → 退出する所の高貴な人 **解説**：「奉る」（謙譲の補助動詞）は抱かれる若君を、「まかり出づ」（謙譲・退出する）は退出してくる所の主（御前の高貴な人）を敬う。

Q58. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 中宮、御簾のうちにて、ものを**仰せらる**。

答え：作者 → 中宮 **解説**：「仰せらる」二重尊敬。

Q59. 敬意の方向を答えよ。

(手紙文)「**承り侍りて**、いとかたじけなくなむ思ひ**たまふる**」

答え：「承り」書き手 → 承る相手／「侍り」書き手 → 読み手／「たまふる」書き手 → 読み手 **解説**：手紙の中の謙譲＋丁寧＋謙譲の補助動詞（下二段「給ふ」）。下二段「給ふ」は会話文・手紙文で使い、聞き手・読み手を敬う。

Q60. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 院、宮に御文を遣はしたりければ、宮、御返り聞こえたまふ。

答え：「遣はし」作者 → 院／「聞こえ」作者 → 院（お返事を申し上げる相手）／「たまふ」作者 → 宮
解説：「遣はす」は「遣る（送る）」の尊敬語で、送る院を敬う。「聞こゆ」は「言ふ」の謙譲語（申し上げる）で、お返事を受け取る院を、「たまふ」（尊敬の補助動詞）はお返事をする宮を敬う。

Q61. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 大納言、御前にさぶらひて、御物語申す。

答え：「さぶらひ」作者 → 御前の高貴な人／「申す」作者 → 御前の高貴な人（お話を申し上げる相手）
解説：「さぶらふ」は「貴人のおそばにお控える」の謙譲語、「申す」は「言ふ」の謙譲語。どちらも、おそばでお話を聞く高貴な人を敬う。

Q62. 敬意の方向を答えよ。

(会話文) 「いとかしこき御方なれば、畏まり侍り」

答え：話し手 → 聞き手
解説：「畏まる」は「恐縮する・つつしむ」意の普通の動詞で、敬語ではない。「侍り」は丁寧の補助動詞（～ております）で、話し手から聞き手への敬意。

Q63. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 中宮、御文を御覧じて、いみじく愛でたまふ。

答え：「御覧じ」作者 → 中宮／「たまふ」作者 → 中宮
解説：両方とも動作主の中宮への尊敬。

Q64. 敬意の方向を答えよ。

(会話文) 「まうで来つ。仕うまつるべきこと侍らば」

答え：「まうで来」話し手 → 詣でた先の高貴な人／「仕うまつる」話し手 → お仕えする対象／「侍ら」話し手 → 聞き手
解説：謙譲＋謙譲＋丁寧。

Q65. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 上、御物の怪にて、苦しませたまふを、皇后、夜昼御祈祷せさせたまふ。

答え：「せたまふ」作者 → 上／「させたまふ」作者 → 皇后 **解説：**どちらも二重敬語とみて、それぞれの動作主（上・皇后）を敬う。「祈祷せさせたまふ」の「させ」は、僧に祈祷をさせる使役とも読めるが、その場合も「たまふ」は尊敬なので答えは同じ「作者 → 皇后」。

Q66. 敬意の方向を答えよ。

(会話文) 「御覧ぜさせ奉らばや」

答え：「御覧ぜ」話し手 → 御覧になる人／「奉ら」話し手 → 御覧になる人 **解説：**「御覧ぜさす」は「御覧にならせる＝お見せする」。「させ」は使役の助動詞で敬語ではない。尊敬の「御覧ず」も謙譲の補助動詞「奉る」も、見る高貴な人（お見せする相手）を敬う。

Q67. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 帝、かしこく御心を動かしたまふ。

答え：作者 → 帝 **解説：**「たまふ」尊敬補助。動作主の帝を敬う。

Q68. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 「御物を賜はり侍りぬ」と申す。

答え：会話「賜はり」話し手 → 物をくださった高貴な人／「侍り」話し手 → 聞き手／地の文「申す」作者 → 申し上げる相手 **解説：**「」の中は話し手から。「賜はる」（謙譲・いただく）は物をくださった人を、「侍り」（丁寧）は聞き手を敬う。外の「申す」は地の文なので作者から。

Q69. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 上、ものをのたまはすれど、遠くてよくも聞こえず。

答え：「のたまはすれ」作者 → 上／「聞こえ」敬語ではない（「聞こゆ」＝聞こえる） **解説：**「のたまはす」は「言ふ」の尊敬語（「のたまふ」より敬意が高い）で、上を敬う。「聞こゆ」には謙譲語（申し上げる）と普通の動詞（聞こえる）がある。ここはお声が「よく聞こえない」の意なので敬語ではない。「え聞こえず」なら「申し上げることができない」（謙譲）になることが多い。

Q70. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「さらば、そのよしを宮に**聞こえ侍らむ**」

答え：「聞こえ」話し手 → 宮（申し上げる相手）／「侍ら」話し手 → 聞き手 **解説**：「聞こゆ」は「言ふ」の謙譲語（申し上げる）で、申し上げる相手の宮を敬う。「侍り」（丁寧の補助動詞）は聞き手を敬う。謙譲＋丁寧。

Q71. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 帝、このことを**聞こしめして**、御涙を流さ**せたまふ**。

答え：作者 → 帝 **解説**：「聞こしめす」は「聞く」の尊敬語（お聞きになる）、「せたまふ」は二重敬語。どちらも動作主の帝を作者が敬う。

Q72. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 院、御車に**奉りて**、御所より出で**させたまふ**。

答え：「奉り」作者 → 院（乗り物の場合は尊敬「お乗りになる」）／「させたまふ」作者 → 院 **解説**：「奉る」は、衣服を「お召しになる」（Q45）のほか、乗り物に「お乗りになる」も尊敬語になる。「させたまふ」とともに、動作主の院を敬う。

Q73. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「宮に**参り侍りて**、宮の仰せを**承りて**、帰りて**申し侍らむ**」

答え：「参り」話し手 → 宮（参上する先）／「侍り」話し手 → 聞き手／「承り」話し手 → 宮（お話をうかがった相手）／「申し」話し手 → 聞き手（申し上げる相手）／「侍ら」話し手 → 聞き手 **解説**：謙譲＋丁寧＋謙譲＋謙譲＋丁寧の連続。謙譲語は、それぞれの動作の受け手（参上する先・お話をうかがう相手・申し上げる相手）を、丁寧語は聞き手を敬う。

Q74. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 入道殿、このことをいとねたく**思しめしけり**。

答え：作者 → 入道殿 **解説**：「思しめす」（尊敬）。

Q75. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 大納言、ありつることを中宮に**啓したまふ**。

答え：「啓し」作者 → 中宮／「たまふ」作者 → 大納言 **解説**：「啓す」は中宮・東宮に「申し上げる」意の謙譲語（絶対敬語）で、申し上げる相手の中宮を敬う。「たまふ」は尊敬の補助動詞で、動作主の大納言を敬う。同じ動作に二方向。

Q76. 敬意の方向を答えよ。

(会話文) 「『君に**奉らん**』となむ思ひ**たまふる**」

答え：会話「奉ら」話し手 → 君／「たまふる」話し手 → 聞き手 **解説**：『 』は話し手自身の思いなので、その中の「奉る」（謙譲）も話し手から、差し上げる相手の君へ。「たまふる」（下二段「給ふ」・謙譲の補助動詞）は話し手から聞き手へ。

Q77. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 御使ひ、宮の御もとより**まかり**帰りぬ。

答え：作者 → 宮（退出してきた所の主） **解説**：「まかり帰る」の「まかる」は「（貴人のもとから）退出する」の謙譲語で、退出してくる所の主（宮）を敬う。帰っていく先の人ではない。

Q78. 敬意の方向を答えよ。

(会話文) 「君は、ただいま**大殿籠りて侍り**」

答え：「大殿籠り」話し手 → 君／「侍り」話し手 → 聞き手 **解説**：「大殿籠る」は「寝」の尊敬語（お休みになる）で、動作主の君を敬う。「侍り」は丁寧の補助動詞（～ております）で、聞き手を敬う。

Q79. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 帝、御琴を召して、**あそばす**。

答え：作者 → 帝 **解説**：「召す」「あそばす」両方とも動作主の帝への尊敬。

Q80. 敬意の方向を答えよ。

(会話文)「その御事、昨日**承**りて、いとうれしくなむ思ひ**たまふ**る」

答え：「承り」話し手 → 承る相手（お話をくださった高貴な人）／「たまふる」話し手 → 聞き手

解説：「承る」は「聞く」の謙譲語で、お話をくださった高貴な人を敬う。「たまふる」は下二段「給ふ」（謙譲の補助動詞）で、話し手自身の「思ふ」に付き、聞き手を敬う。

応用編 / 30

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

源氏物語・枕草子など難関大頻出。

Q81. 敬意の方向を答えよ。（源氏物語・桐壺）

(地の文) いづれの御時にか、女御、更衣あまた**候ひたまひ**ける中に…

答え：「候ひ」作者 → 帝（仕える対象）／「たまひ」作者 → 女御・更衣 **解説**：「候ふ」（謙譲）→ 受け手の帝、「たまふ」（尊敬補助）→ 動作主の女御・更衣。複数の女御更衣+帝の三角構図。

Q82. 敬意の方向を答えよ。（源氏物語・桐壺）

(地の文) すぐれて時めき**たまふ**ありけり。

答え：作者 → 桐壺更衣（帝の寵愛を受けている人） **解説**：「たまふ」尊敬補助。動作主＝桐壺更衣を作者が敬う。

Q83. 敬意の方向を答えよ。（源氏物語・桐壺）

(地の文) はじめより我はと思ひ上がり**たまへ**る御方々…おとしめそねみ**たまふ**。

答え：「たまへ」作者 → 御方々（女御・更衣たち）／「たまふ」作者 → 御方々 **解説**：「たまふ」（尊敬補助）→ 動作主の女御・更衣たち。

Q84. 敬意の方向を答えよ。(枕草子・香炉峰の雪)

(地の文)「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば…

答え：作者 → 中宮 (仰せの動作主) 解説：地の文の「仰せらる」は中宮定子への二重尊敬。

Q85. 敬意の方向を答えよ。(枕草子・香炉峰の雪)

(地の文) 御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。

答え：作者 → 中宮 解説：「笑はせたまふ」二重尊敬。動作主の中宮を作者（清少納言）が敬う。

Q86. 敬意の方向を答えよ。(源氏物語・若紫)

(会話文)「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」

答え：敬語なし（「逃がし」「籠め」は普通の動詞。参考問題） 解説：若紫（のちの紫の上）が祖母の尼君に訴える、幼い子どもの言葉で、敬語は使われていない。

Q87. 敬意の方向を答えよ。(伊勢物語・東下り)

(地の文)「これなむ都鳥」と言ふを聞きて、…と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

答え：敬語なし（「言ふ」は普通の動詞。参考問題） 解説：渡し守の言葉を、普通の動詞「言ふ」で書いている。地の文に敬語はない。

Q88. 敬意の方向を答えよ。

(地の文) 帝、隠れさせたまひにしかば、御名を村上の帝と申す。

答え：「させたまひ」作者 → 帝／「申す」作者 → 帝（「村上の帝」とお呼びする相手） 解説：「隠れさせたまふ」は「お亡くなりになる」。「させたまふ」は二重敬語で、動作主の帝を敬う。「～と申す」は「～とお呼び申し上げる」の意の謙譲語で、呼ばれる帝を敬う。

Q89. 敬意の方向を答えよ。(大鏡・競べ弓)

(地の文) この殿わたらせたまへれば、思ひかけずあやしと、中関白殿思し驚きて、いみじう饗応し申させたまうて、…（この殿＝道長、中関白殿＝道隆）

答え：「思し」作者（語り手）→ 中関白殿（道隆）／「申さ」作者（語り手）→ この殿（道長）／「せたまう」作者（語り手）→ 中関白殿（道隆） **解説：**「思し驚く」は「思ひ驚く」の尊敬語で、驚いた中関白殿を敬う。「饗応し申す」の「申す」は謙譲の補助動詞（～申し上げる）で、もてなしを受ける道長を敬う。「せたまう」は尊敬「す」＋尊敬「たまふ」（ウ音便）の二重敬語で、もてなす中関白殿を敬う。大鏡は語り手（大宅世継）が語る形なので、「語り手から」と答えることもある。

Q90. 敬意の方向を答えよ。（源氏物語・桐壺）

（地の文）一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲の君と、世にもてかしづき **きこゆれ**ど、この御にほひには並び **たまふ**べくもあらざりければ…

答え：「きこゆれ」作者 → 一の皇子／「たまふ」作者 → 一の皇子 **解説：**「きこゆ」は謙譲の補助動詞（～申し上げる）で、世の人が大切にお世話する一の皇子を敬う。「たまふ」は尊敬の補助動詞で、並ぶ動作の主の一の皇子を敬う。同じ人に謙譲と尊敬の両方が向く。「この御にほひ」は光源氏の美しさ。

Q91. 敬意の方向を答えよ。（源氏物語・桐壺）

（地の文）人のそしりをもえ憚ら **せたまはず**…

答え：作者 → 帝 **解説：**「せたまふ」二重尊敬の打消。動作主の帝を作者が敬う。

Q92. 敬意の方向を答えよ。（枕草子・中納言参りたまひて）

（地の文）「隆家こそいみじき骨は得て **はべれ**。…」と **申したまふ**。（中納言隆家が、姉の中宮定子に申し上げる場面）

答え：「はべれ」中納言隆家（話し手）→ 中宮（聞き手）／「申し」作者 → 中宮（申し上げる相手）／「たまふ」作者 → 中納言隆家 **解説：**「はべり」は丁寧の補助動詞（「こそ」の結びで已然形）で、話し手の隆家から聞き手の中宮へ。地の文の「申したまふ」は、謙譲「申す」が申し上げる相手の中宮を、尊敬「たまふ」が動作主の隆家を、作者（清少納言）が敬う。発信者は会話と地の文で分かれる。

Q93. 敬意の方向を答えよ。（大鏡・競べ弓）

（地の文）また入道殿射 **たまふ**とて、「摂政・関白すべきものならば、この矢当たれ」と **仰せらるる**に、…（入道殿＝道長）

答え：「たまふ」「仰せらるる」作者（語り手）→入道殿（道長） **解説：**「射たまふ」の「たまふ」は尊敬の補助動詞、「仰せらる」は「仰す」＋尊敬「らる」の二重敬語で、どちらも動作主の道長を敬う。「 」の中は道長自身の言葉なので、敬語は使っていない。

Q94. 敬意の方向を答えよ。(源氏物語・夕顔)

(地の文)「かの白く咲けるをなむ、夕顔と**申し侍る**」と**申す**。

答え：「申し」「侍る」隨身（話し手）→光源氏（聞き手）／「申す」作者→光源氏 **解説：**「 」は隨身が光源氏に申し上げる言葉。謙譲の「申し」と丁寧の「侍る」（「なむ」の結び）は、話し手の隨身から聞き手の光源氏へ。外の「申す」は地の文なので、作者から申し上げる相手の光源氏へ。

Q95. 敬意の方向を答えよ。(源氏物語・夕顔)

(地の文) 白き扇のいたうこがしたるを、「これに置いて**参らせよ**。枝も情けなげなめる花を」とて取らせたれば、門開けて惟光朝臣出で来たるして、**奉らす**。(夕顔の宿の女童が、光源氏の隨身に扇を渡す場面)

答え：「参らせよ」女童（話し手）→光源氏（花を差し上げる相手）／「奉ら」作者→光源氏 **解説：**「参らす」は「与ふ」の謙譲語（差し上げる）で、女童が、花を受け取る光源氏を敬う。「奉らす」の「奉ら」も謙譲語（差し上げる）で、作者が光源氏を敬う。「す」は「惟光を通して差し上げさせる」使役で、敬語ではない。

Q96. 敬意の方向を答えよ。(徒然草・第五十二段)

(地の文) 仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を**拝ま**ざりければ…ただひとり、徒歩より**詣**でけり。

答え：「拝ま」敬語ではない（普通の動詞）／「詣で」作者→石清水八幡宮（参詣する先の神） **解説：**「詣づ」は「行く」の謙譲語（参上する・お参りする）で、行き先の石清水八幡宮（の神）を敬う。「拝む」は普通の動詞で、敬語ではない。

Q97. 敬意の方向を答えよ。(更級日記)

(地の文・自伝) あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに**生ひ出で**たる人、いかばかりかは怪しかりけむ…

答え：敬語なし（「生ひ出で」は普通の動詞。参考問題） **解説：**作者（菅原孝標女）が自分のことを書いている。自分の動作には敬語を使わないので、敬語はない。

Q98. 敬意の方向を答えよ。（平家物語・敦盛最期）

（地の文）「同じくは、直実が手にかけ**まゐらせて**、後の御孝養をこそ**つかまつり候はめ**」と**申し**ければ…

答え：「まゐらせ」「つかまつり」熊谷（話し手）→ 敦盛／「候は」熊谷（話し手）→ 敦盛（聞き手）／「申し」作者→ 敦盛 **解説：**「**まゐ**」は熊谷直実が敦盛に言う言葉。謙譲の「まゐらす」（補助動詞・～申し上げる）と「つかまつる」（「す」の謙譲語・いたす）は動作の受け手の敦盛を、丁寧の「候ふ」は聞き手の敦盛を、話し手の熊谷が敬う。地の文の「申す」は、作者から申し上げる相手の敦盛へ。

Q99. 敬意の方向を答えよ。（源氏物語・桐壺）

（地の文）前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生まれ**たまひ**ぬ。

答え：作者→ 男御子（光源氏） **解説：**「たまふ」（尊敬補助）→ 誕生の主体・光源氏。

Q100. 敬意の方向を答えよ。（源氏物語・桐壺）

（地の文）父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、なにごとの儀式をもてなした**たまひ**けれど、とりたててはかばかり後見しなければ、事ある時はなほよりどころなく心細げなり。

答え：作者→ 母北の方（桐壺更衣の母） **解説：**「もてなしたまひ」の主語は「母北の方」（桐壺更衣の母）。尊敬の補助動詞「たまふ」で、作者（紫式部）が母北の方を敬う。前の文までの主語（桐壺更衣）から変わっていることに注意。

入試レベル編 / 20

採点振り返り

- 基礎（Q1～Q20）： / 20
- 標準（Q21～Q50）： / 30

- 応用 (Q51~Q80) : /30
 - 入試レベル (Q81~Q100) : /20
 - 合計 : /100
-

あとかき

敬意の方向の核心 : - **地の文** → 敬意の発信者は作者 - **会話文** → 敬意の発信者は話し手 - **心内文** → 敬意の発信者は思っている人物 - **手紙文** → 敬意の発信者は書き手 - **尊敬** → 動作主へ - **謙譲** → 動作の受け手へ - **丁寧** → 聞き手・読み手へ

源氏物語・枕草子・大鏡など、敬語の連続が難関大頻出。「誰が」「誰に」を構造的に分解する力が必要。

著作権 : 個別指導塾フィット / 中本裕太